

日連上人の浄土宗排撃について

井 上 淑 男

かの日蓮は貞応元年（一二二二）二月十六日に安房小湊の漁家に生れた時は、法然がすでにこの世を去つて十年後のことである。ために法然と日蓮とは、この地上において生の時を共にすることはなかつたのである。

日蓮は嘉禎三年（一二三七）十六歳にして剃髪して、後の十五年間、諸宗の學者について仏教一般に対する研究を積み、その間に彼の法華經を中心とする宗教的信念が確立したのである。そして建長五年（一二五三）四月二十八日、清澄山に登り、初めて南無妙法蓮華經の題目を提唱したのである。日蓮宗に於いては、この時を以つて立教開宗の時とする。後に、日蓮はこの時のことを述懐して、「波木井殿御書」に、

生年三十二歳にして建長五年癸丑四月二十八日念仏は無間の業なりと見出しけるこそ時の不祥なれ、云云。

といつてゐる。不祥というのは浄土宗打倒が、彼の眼目であつた事が充分に窺われるであらう。

打倒浄土宗の叫声をあげるや、日蓮は鎌倉に移りそこを中心、主として浄土宗を批判の対象にして、街頭での所謂折伏に着手したのである。その上さらに多数の論書を起草して、これを幕府を始め諸方に配付し、その教旨の弘通に努めたのである。殊に布教の当初、正嘉元年（一二五七）から正元元年（一二五九）・文応元年（一二六〇）にかけて天変地妖相ついで起つた。その天変地妖の起る原因は、浄土宗という邪教が流布しているためだとして、「守護國家論」を正元元年に作り、念仏門を破斥し末法の時こそ、法華經弘通の必要な所以を論じ、その翌年には、「災難対治鈔」を著し、ついで「立正安國論」を文応元年（一二六〇）に著している。「災難対治鈔」には、

於国土依令流布選択集起災難。

といつてゐるが、これは社会生活の不安と人心の悪化の根本原因は法然が浄土宗を創設したためだとし、「選択集」をよりどころとした浄土宗の興行は、天災地変を起

す原因であるとするのである。彼が鎌倉幕府に提出したところの「立正安国論」にも、法然を唯一の教敵として攻撃し、

後鳥羽院御宇有法然 作選撰集矣 則破

一代之聖教遍迷十万之衆生

といつてゐる。そして今の内に浄土宗の流布を停め、法華經をひろめなかつたならば、他国からの侵略を受け、国内には内乱が起るであろうとして、「立正安国論」を文応元年七月十六日に宿谷左衛門光則を経て、之を時頼に呈したのである。

日蓮が「立正安国論」を幕府に提出した事については、之を以て唯名を公に托して私を擠さんとしたものである。即ち天変地妖を利用して他宗を排擠し、法華宗を以て之に代え、自己の顯達を求めんとする利己論たるに過ぎない。然るに偶然にも蒙古の事が起つたので、遂に他宗攻撃の辞柄を得て、元寇豫言の名を得しめたのである。

という評もある。

いずれにしても、天災地変なり、敵国侵入ということ

をもつて、直ちに法然が「選撰集」を著して浄土宗を興行したことのためであると説くことは、今日の常識よりするならばナンセンスなことである。もとより天変地妖は自然界の現象でありそれ自体は善惡を起しているものである。また蒙古の侵入ということも、元の世祖忽必烈の侵略的野心のために引起されたところの戦争であつて、いずれにしてもこのことを持つて法然の念仏興行が直接原因であるとするのは不合理であらう。

さて安国論を幕府に提出したが、かえつて幕府より迫害を受けなければならなかつた。また、彼の信念より發する言葉には、かなり常軌を逸した点があり、随所でその信念を披瀝して止まなかつたために、諸宗の徒からも迫害を受け、ここに所謂の日蓮宗の「四箇の法難」と言ふ、松葉谷の法難・伊東の法難・東条の法難・龍ノ口の法難が相続くのであるが、それは省略する。

文永元年（一二六四）に日蓮は故郷に於いて「当世念仏者無間地獄事」という書を作り、盛んに念仏無間を唱えており、文永五年（一二六八）には、建長寺の蘭溪道隆に与えた書に

亡国悪法 律宗国賊妄説

といえる。「四箇格言」を宣言しているのである。

この四箇格言について思うに、此の四箇は皆便宜に従つて語を立てたものであらう。ために無間才の破は亦互に相通するものである。即ち、開目鈔巻下に「禪宗無間」といい、箇御器鈔に「真言師無間」といい、開目鈔巻上に「天魔法然」といい、撰時鈔巻下に「念仏亡国」と云う語があるのをみても解ることである。では何故に日蓮が開宗後の伝道において、法然の念仏宗を極力排撃したかというならば、当時の仏教界の状況として法然寂後急速に上下の階級の間に広まった念仏は転換期の時代の混乱した人心の要求に応じて、その彌陀一仏の信仰は旧来の聖道門諸宗をして衰微の淵におとし入れ再起不可能なるかの感をいだかしめるものがあり、それとともに彼の郷里安房国東条の地頭才が念仏を支持していたために、そこで日蓮の唱題成仏の主張もまず才一に浄土宗の念仏を打倒することをさしおいて、当時の社会にうけ入れられる余地は無いと考えた結果であらう。

円戒の研究

——特に法然の念仏と戒に就いて——

北 村 弘

法然上人は久安六年（一一五〇）十八歳の時、叡山黒谷の慈眼房叡空の室に入り、円頓戒の伝受をされたことは「勅修御伝」「十六問記」及び「九巻伝」等により明らかである。而して法然上人は伝教大師以来才十代目の天台円戒の正統者とされ、戒徳の秀れた高僧として親しまれ皇室を始め、貴族庶民に至るまで多くの人々より帰依を受け、これらの人々に授戒された事は諸伝に記すところである。貴族の中で最も法然上人と関係の厚かつた人は九条兼実であり、彼の日記「玉葉」の中でも文治五年（一一八九）から建久八年（一一九七）頃までの記事に於ても実に七回に亘る授戒の行われた事が推察されるのである。その一例を挙げると、建久二年九月廿九日の条に次の如く記されている。